# この地から

論説顧問
丸山貢一

## 若返る林業の現場

# 「三方よし」森を次世代へ

### 南佐久郡佐久穂町

チェーンソーで入れた切り込みに、くさびを何度も打ち込む。ほどなくカラマツは傾き、地響きを立てて倒れた。

4月上旬、佐久穂町の林業会社「吉本」の現場、北相木村の民有林を訪ねた。雲野希勇（ゆう）さん(20)が先輩の指導を受けながら伐倒作業に取り組んでいた。

長野市出身。県林業大学校で学び、数社で就業体験をし、同社を選んで入社したばかり。「ほぼ狙った方向に倒せた。自分の成長が見えるのが面白い」

林業経験7年目の寺島一希さん(24)は、伐倒、枝払い、一定の長さにそろえる玉切りができる高性能機械ハーベスタの操作を初めて担っている。

伐採後はカラマツ苗を植える。森の更新だ。「山を守っている」と自負する。

入社6年目の原田桂吾さん(25)は愛知県出身で林業大卒。能力や判断の引き出しが試される現場が面白い。

材価が上がれば給与も増え、仲間が増える。そのために良い材をいかに早く切り出すかが現場の仕事と考える。

同社は1887年の創業。林業の衰退や外材流入など時代の逆風をしのぎ、事業を営々とつないできた。

今、追い風が吹いている―。社長の由井正宏さん(47)はそう感じている。

戦後植えられた人工林が成熟し主伐期（収穫期）に入った。東信のカラマツはしなやかで強く、合板材などの需要が強い。価格も上昇している。

森林の担い手育成を支援する林野庁の「緑の雇用」をきっかけに就業者が増えた。近年は高性能機械を扱うユーチューブの動画も若者の人気を集める。

同社の現場従業員も若返った。長野、群馬、岩手の3県に30人。いずれも月給制の正社員だ。福利厚生や安全教育に力を入れ、定着率は高い。

カラマツの倒す方向を見定める雲野さん（左）。丸太を積む佐久穂町の南佐久北部森林組合の現場（右）

佐久穂町の南佐久北部森林組合でも40代～20代の職員が高性能機械を操作してカラマツを収穫していた。杉本貴亮（たかあき）さん(32)は「伐倒を終えた時の達成感」が何物にも代えがたいという。

もともと別の林業事業体で働いていたが、製造工場に転職し10年ほど勤めた。同じ作業を繰り返す単調な日々。そんな時、同組合が機械化を進めていると聞いて林業現場に戻った。

組合は機械導入に加えて、独自の省力化、効率化を重ねている。

伐採後に苗を植える再造林は斜面に残った枝の片付けや低木を除く「地ごしらえ」から始まる。人手と経費がかかり、再造林が進まない要因だった。

そこで試行錯誤の末、鉄骨と丸太で大きな熊手を製造。重機で引っ張ってかき集める方法を実用化した。

職員の負担を軽減し、作業がスピードアップしたため、再造林率は県内の平均を大きく上回る7割に達している。

給与は月給制だ。基本給に加え、搬出した材積に応じた歩合給を導入。平均年収は500万円を超えるという。

山主への還元も手厚い。販売収入に加え立木1立方㍍当たり千円を配当する。

森から得た利益を山主、職員、森林組合が3分の1ずつ分け合う。「三方よし」の経営を目指している、と代表理事専務の島崎和友さん(64)は話す。

旧八千穂村の村誌によれば、昭和30年代から40年代、裸同然だった山に、小中学生や青年団を含めて村の人々が総出でカラマツの苗を植えた。

町有林（4563㌶）には標準伐期を過ぎた60年生以上の木が多くある。このため官民の組織が長期戦略を策定。毎年20㌶ずつ主伐、造林を進めている。50年先を見据えた森の整備だ。

官民が協力する林業のキャリア教育もスタートして12年目になる。町有林を教室に佐久穂小・中学校の児童生徒が学習・体験活動に取り組む。

講師を務める吉本の由井さんは「次の担い手が育ってほしい」と期待する。

シカの食害や住宅着工減など課題は尽きないが、若い世代の増加は各地の現場でもみられる。「三方よし」の営みが育って森と林業が若返れば次世代への大きな贈り物になろう。（次回は6月1日）